

# 『とりかへばや物語』構想上の綻びと作者の姿勢

長 内 綾 乃

## 一、はじめに

古本からの改作が前提とされている現存『とりかへばや物語』は、男性気質の女君と女性気質の男君とが、互いの性役割を取り替えて社会生活を送るも、紆余曲折を経て二度目の取り替えを行い、結局はそれぞれ元の性役割に戻り大団円を迎えるというのが、おおよその筋書きとなっている。

物語の設定は緻密に計算され、女君の四の君との夫婦関係や男性社会で築いた右大将としての地位、吉野の姉君や麗景殿の女との関係も、きょうだいが元の性役割に戻ることによって、男君が見事に回収していく。もちろん、きょうだいが異装をして社会生活を送っていたという秘密は隠蔽され、元の性役割に戻ったことも内密に留まらざるを得ない。一見、完璧に思われるような取り替えの仕掛けであるが、ここで一つ、二度目の取り替え後の物語世界に綻びが生じて

いることに気づく。

それは、以下の先行研究にも指摘されているような母子関係の矛盾のことである。本稿では、この構想上の綻びが物語世界に与える影響を考察する。また、『無名草子』において今本『とりかへばや物語』が高評価を受けている点から、そのような綻びがあるにも関わらず改作後の今本の方が評価されること、また読者の視点と今本作者の工夫に迫りながら『とりかへばや物語』についての評価を問う。

物語中に生じた矛盾について論じている先行研究は管見の限り見られない。わずかに、吉海直人氏が、

まして物語は二人の子供の性を取り替えたまま展開するのであるから、途中でその性が再び元に戻された場合、邸内(身内間)ではさほど問題にならないとしても、世間的にはゆゆしい疑念が提起されることになる。要するに外部の人々は、子供の個性ではなくて性別で判断するわけであるから、子供の性が逆転す

ることはすなわち親子の取り違えとして映ることになる。つまり一度女君が男装して社会に出たら、その女君が元の女の姿に戻ったとしても、世間を欺くためには女装の男君の母を親としない(男君はその逆)、すぐにおかしなこと(母親の取り違え)になってしまはずである。<sup>2)</sup>

と、二度目の取り替え後の母子関係に疑問を呈しており、「母親問題の矛盾も完全に棚上されており、そのため従来の研究においても、このことに関する疑問は全く提示されていないようである」と指摘している。この指摘の通り、吉海氏以前にこの矛盾について指摘する先行研究は見られない。この吉海氏の指摘を踏まえた上で、中島正二氏は、

(前略) 男君の自邸新築は、吉海氏の指摘する母親の矛盾(『住吉物語』・『とりかへばや物語』を中心に)『中世王朝物語を学ぶ人のために』世界思想社 一九九七年)の露呈を、防ぐ方向に作用するものでもある。

吉海氏の指摘する母親の矛盾とは、私なりに単純化すると、こういうことになる。仮に、男君をA、その母をa、女君をB、その母をbとおく。きょうだいの異性装時、世間から見れば、aは女(A)の母、bは男(B)の母であるから、異性装をやめ、本来の性にもどった後も、世間の目を欺くには、aと女(B)、bと男(A)が(すなわち、男君の母と女君、女君の母と男君が、

それぞれ親子のふりをしなければならなくなる。吉海氏の指摘するように、こういった矛盾は秘密の露呈を招きかねない。男君の二条邸新築は、母子のふりをするよりは、関白邸から独立し、親から離別した方が容易で安全だという判断をも含んでいるようである。<sup>3)</sup>

と、問題の所在をまとめ直し、男君の自邸新築によって母子を切り離すことが、二度目の取り替えの秘密を隠蔽する役割を担っていると分析しておられる。

母子関係の矛盾は改作によるものとして目をつぶるべき問題であるから、今まで指摘がなされなかったのだろうか。それとも、読者はこの矛盾に気づかなかったのであろうか。あるいは、この矛盾さえも「天狗の業」<sup>4)</sup>で片付けられているのだろうか。

## 二、問題の所在

以上の先行研究を踏まえて問題を具体的に整理すると、物語に生じる構想上の綻びとして、この母子関係の矛盾がある。

左大臣の二人の北の方から生まれた二人の子が一度目の取り替えを行い、性役割を交換した後、二度目の取り替えを期に元の性別に戻るとどうなるか。二人が性役割を交換したのは幼少期である。人前に出たがる活発な女君を周囲の人間が男君と勘違いをしたことが始まりであった。これはまだきょうだいが左大臣邸に移る前のこと

である。つまり、世間では藤中納言のむすめ（女君の母親）には男児が、源宰相のむすめ（男君の母親）には女兒が生まれたと認識していたはずである。

そして二度目の取り替えの後に、異装を解除しお互いの役割を入れ替えた。世間にきょうだいの異装の秘密が露顕しないようにするために、異装解除後は、男君は西の対の女君の母親と親子関係を結び直し、女君は東の対の男君の母親と親子関係を結び直すという具合に、親子関係の取り替えを行う必要がある。世間を欺き続けるためには少なくともそれぞれの母親が死ぬまでは、親子関係を偽り続けなければならない。

しかし、二度目の取り替え後、左大臣邸に戻ったとき、

【本文引用①】

暗きほどにまぎれて京におはし着きて、この女君をば督の君のおはしましゅうにその御方の御帳の前に入れてまつりて、男君は御前にさぶらひたまひて、（巻三、三九九頁）<sup>5</sup>

と、男君は女君を東の対に入れた。女君の母をはじめとした女君の関係者たちは西の対に住んでいるはずであるため、ここにも同様の矛盾が指摘できる。

また、女東宮と男君のもとに生まれた若君を引き取る場面においてこの矛盾の存在は見逃すことのできないものになっている。

【本文引用②】

大将殿、母上に忍びて聞こえ知らせて預けきこえたまふ。いとあはれにうれしく思ひて、大臣にも、「かく」と聞こえたまへば、驚きて、御乳母などなべてならぬを選びてさぶらはせたまひて、いみじくかしづききこえてぞ養ひきこえたまふ。世にはただ、「忍びたる御あたりより出できたまへる」と言ひなしける。（巻四、四三九頁）

右のように、男君は母親に生まれた子供のことを知らせた。父親よりも先に母親に相談するのは、女君の捜索に伴って男君が異装解除を決意したときと同様である。ここで男君が相談した相手は、西の対に住む女君の母親ではなく、東の対に住む自分の母親のほすだ。男君もきょうだいの母親の關係が以前より良好になったといえども、我が子を異母きょうだいの母親に預けることはしないだろう。ここで母親が孫の誕生を「いとあはれにうれしく思」っている様子は、性別を偽り、女性として社会生活を行ってきた息子が父親になった、つまり、男としての性役割を果たすことができるようになったことに對する喜びの表れであろう。女装の男君は世間的にはあくまで女性であるため、その母親のもとに子供を預けるといふことは、世間つまり物語世界の住人からは、当然その女性が産んだ子供と見られることになる。そのため、作中で女春宮との間に生まれた若君を男君の実の子という扱いにしておきたいのならば、男装の女性の母親に養育してもらわなければならないのである。男君は周囲の人

間に左大臣家の秘密から意識を逸らせるためには、女君の母親に若君を預ける必要があったのだ。

しかし、男君は自分の母親に息子を預けた。一般的に考えると、この状況は左大臣家の周囲の人からは「右大将が隠し子を尚侍の母親に預けた」と噂になるのではないのだろうか。右大将の母親が藤中納言の娘であることは周知の事実であるためである。周囲の人から怪しまれないようにするためには、男君は西の対に住む女君の母親に若君を預けて養育してもらわなければならない。あるいは、本文引用①の例のように、母親共々住まいを入れ替えたのだろうか。しかし、そのようなことは描かれていない。また、たとえ住まいを入れ替えたとしても、右大将の母親が藤中納言のむすめ、尚侍の母親が源宰相のむすめという世間の認識は入れ替えることができないため、この矛盾は解消されない。

### 三、男君の自邸新築

母子関係に矛盾が生じるにも関わらず、読者はよく注意して読まないといこの綻びを見落としてしまう。つまり、物語の構想上に綻びが生じていても、違和感を覚えることなく読み進めることができるのである。なぜ、読者はこの綻びを見落としてしまうのか。そこには今本作者が物語に施した工夫があるのではないだろうか。具体的には以下の三つの工夫が考えられる。

第一に、先に述べた先行研究において中島氏が指摘した「男君の自邸新築」が考えられる。中島氏が「男君の二条邸新築は、母子のふりをするよりは、関白邸から独立し、親から離別した方が容易で安全だ」という判断をも含んでいるようである」と指摘しているように、二条邸の新築はこの母子問題の矛盾の露呈を防ぐ効果がある。男君は自邸を新築することで、①吉野の姉妹を引き取り、②四の君を引き取り、③女東宮との若君を新邸に招き、④女君に出産の場所をあたえた。これは中島氏の指摘するとおり、関白家からの脱却を図るとともに、二度目の取り替え後に、母子関係の矛盾に気づかせないように物語の展開へと読者の意識を逸らせているのである。

しかし、宰相中将を二条邸で中の君に引き合わせることは、(母子問題ではないが)女君と男君の性役割の交換という秘密の露頭に繋がる可能性があるということも指摘できる。実際に、中の君は、

#### 【本文引用③】

女君は、さださだと言ひ聞かする人はなかりしかど、さにやとほのぼの心得ることの筋なめりと思すも、げにいかにおぼつかなくあやしく心得がたく思すらんと、御心のうち苦しう推し量らるれど、誰がためにもいとどめづらかにあやしかるべきことを、きと聞こえ出でんもうしろやすからぬことなりしかと思し  
かためて(後略)(巻四、五〇八頁)

とあるように、きょうだいの秘密を知っており、右の場面において

宰相中将に問いただされたのである。しかし、今本作者は中の君に秘密を宰相中将に話さないという選択を取らせた。物語に生じた綻びを考慮すると、この場面のやりとりは読者に母子関係の決定的な矛盾よりもきょうだいの取り替えの秘密の露頭が起きてしまうかも知れないという危機感を与える。つまり、「男君の自邸新築」という要素は、中島氏が指摘した、矛盾が生じている親子を引き離すという役割だけでなく、読者の意識を「秘密の露頭の危機と常に隣り合わせの展開」へ誘導する役割をも担っているのである。そしてこの、「秘密の露頭の危機と常に隣り合わせの展開」というものは、『とりかへばや物語』の主軸となる展開であり、今本作者は、常にこの展開に読者の意識を集めようとしていたのである。

#### 四、母親の物語からの退場―二人の母から一人の母親へ―

第二に、「母親の物語からの退場」があげられる。

『とりかへばや物語』は大きく二分することができる。きょうだいの幼少期から一度目の取り替えを行い、男女の性役割を入れ替えた後、女君が妊娠して宇治に失踪する前半部分と、女君を捜して異装を解いた男君が女君を見つけ出し、二度目の取り替えを果たした後、大団円を迎えるという後半部分である。前半では男君、女君の宮中生活に際し、きょうだいの母親たちの様子も描かれてきたが、後半になるにつれ、徐々にきょうだいの母親は物語から退場してい

く。この「母親の物語からの退場」も、今本作者が物語に施した工夫と捉えることができよう。

ここで、それぞれの母子関係について整理する。それぞれの母親の基本的な情報は以下の引用から読み取ることができよう。

#### 【本文引用④】

- 1 北の方二所ものしたまふ。ひとり源の宰相ときこえしが御むすめにもしたまふ。御心ざしはいとしもすぐれねど、人より先に見初めたまひてしかばおろかならず思ひきこえたまふに、いとど世になく玉光る男君さへ生まれたまひにしかば、またなく去りがたきものに思ひきこえたまへり。いま一所は藤中納言ときこえしが御むすめにもしたまふが御腹にも、姫君のいとうつくしげなる生まれたまひしかば、さまざまめづらしく、思ふさまに思しかしづくこと限りなし。(巻一、一六五―一六六頁)
- 2 上たちの御有様のいづれもいとしもすぐれたまはぬを、思ふさまならず口惜しきことに思したりしかど、今は君たちのさまさまうつくしうて生ひ出でたまふに、いづれの御方をも捨てがたきものに思ひきこえたまひて、今はさる方におはしつきにたるべし。(巻一、一六六頁)
- 3 今は、軽びたる御歩きもつきなきほどの御よそほしきなれば、殿広く造りて、西、東の対に二所の北の方を住ませきこえて、

殿をば玉の台にみがきて殿の御出居にぞせられる。これにも  
ろともにさし並びて心ゆく北の方のおはせぬは、なほ口惜しき  
ことなりかし。十五日づつ羨みなく通ひたまふ。(巻一、一六九頁)

源宰相のむすめは男君を産み、藤中納言のむすめは女君を産んだ  
ことがわかる。また、それぞれの北の方を西の対と東の対に分けて  
住ませ、それぞれ月の半分ずつ通い、両者を対等に扱ったことが  
描かれている。

【本文引用⑤】

里の御住まひにては、いにしへは上たちの御いどみ心の名残り  
とのほかに疎々しかりしかど、この二所のほかにはまた類もな  
し、わが世も知らぬを(巻一、一九九〜二〇〇頁)

さらに、一人の夫を争っているで当然なことなのだが、きょう  
だいの幼少期には母親たちは不仲であり、きょうだいを会わせるこ  
とがなかったことが読み取れる。ここでの「いにしへは」は「疎々  
しかりしかど」に掛かるので、その後も母親たちが互いに北の方とし  
ての競争心があったことが予想される。

それぞれの母親について見ていくと、まず女君の母親(藤中納言  
のむすめ)であるが、具体的な様子が描かれることは少なく、以下  
の二つの場面が上げられる。

【本文引用⑥】

北の方に、「かくなん」とのたまふに、「子めかしからん人のむ

すめ、あやしなど思ひ咎め言ふべきならず。ただうち語らひて、  
人目を世の常にもてなして出で入りせよかし」とうち笑ひて、  
「よき後見なり」とのたまふ。(巻一、一八三〜一八四頁)

一つ目は、女君と四の君の結婚に際して、楽天的とも無責任とも  
とれる発言をしている姿が描かれている場面である。その他の用例  
は、男装時の女君が左大臣邸に帰るときは、「殿、上」とあるように、  
父親とともに母親の存在が描かれている。

【本文引用⑦】

(女君八) 念じて御前にてもまゐりなどすれば、(左大臣八)  
いとうれしと思し慰めて、もろともにきこしめす。母上は、な  
かなかいとあらあらしくて、いかなることも見とがめたまはず。  
(巻二、三〇一頁)

二つ目は、女君の妊娠時に母親であるにも関わらず、娘の変化に  
気づかない大雑把な気質であるという母親の性格が描かれている。  
しかしこの後、このような具体的な母親の描写は一例もない。これ  
らの場面の他は、女君失踪の際に倒れた父左大臣を看病しているこ  
とが男君の母親の発言から窺うことができるが、その後女君の母親  
が物語に登場することはない。しかし、女君の母親が登場しなけれ  
ばならないはずの場面はあり、その場合は以下のように描かれている。

【本文引用⑧】

督の君、女御の宣旨かうぶりたまふ。やがて四月に后に立たせ

たまふ。儀式有様世の常ならんや。年ごろあるべかりしことどもものいみじう心もとなかりつるなれば、いと誰も誰も御心ゆきたまふべし。(巻四、五〇五頁)

ここでは、作者は女君の立後の儀について具体的な行事の描写をしないようにしている。このことから、女君の母親は後半は完全に物語世界から退出しているといえよう。

一方、男君の母親(源の宰相のむすめ)は以下のように描かれている。

【本文引用⑨】

上に、「かく」など聞こえたまへば、「いさや、いかなるべきことにかと、え思ひ定められでなん」とのたまへば、中納言の有様を見ればこれもかうさまにてよかるべきにもやあらん、仰せ言違へず、げに後の位に定まりたまふやうもありなん、思ひの外にめでたきことにてこそあらめ、と思す。(巻一、一九四頁)

この場面は男君の母親の様子が具体的に描かれている場面である。女君の結婚の時と同様に父左大臣は子供の出仕について母親に相談しているが、男君の母親は自分には判断できかねるといった曖昧な態度を見せる。これは、女君の母親が女君と四の君の結婚に際して、きっぱりと、結婚すればよいといった旨の言葉をかけた様子とは対照的であり、息子の身を案じている母親の姿を読み取ることができる。

その後、女君の母親が二度目の取り替えを境に物語世界から退場するのに対して、男君の母親はその姿が具体的に描写され続ける。男君が異装を解除して女君を捜索する場面では、

【本文引用⑩】

1 殿に思し言はんもいみじかるべければ、上に心細げに聞こえなしたまひて、(巻三、三四二頁)

2 母上、こはいかなることぞとあさましくなりて、「いなや、いかなる御心変はりぞ。あえかに女の様にてなり果てたまへる御身に、いづくをいづくと尋ねたまふべきぞ」と、ただ泣きに泣きたまへば、(巻三、三四二頁)

3 忍びがたげなるを、げにとうち泣きて、「いかなるべきことにか。とかく思しやるもげにさるべく。御心にこそはあなれ」とのたまふを、(巻三、三四三頁)

4 長き御髪を押し切りて例の髻にとりなしたまふほどは、母上、御乳母など、「こはいかなることぞ」とあさましくいみじけれど、もとの御有様ただこれぞあるべきことなれば、いかにも妨げきこえず。この世のものならぬ御様なれば、思し得るところおろかならじと思し慰めながらぞあさましき。(巻三、三四四頁)

5 「これを殿に疾く見せたてまつらばや。尚侍にてそぞろに過ぎしたまふも、御かしづきのみこそめでたけれ、この御ために、

大将にてこれをあはせたまつらんに、いかばかりうれしくめでたからん」と、母上も御乳母も、なかなかうれしがるべきこととにみな慰めぬべし。(巻三、三四五頁)

とあるように、息子を心配する母親の姿が描かれている。さらに、男君は女君を捜す途中、吉野で母親に当てて手紙を書いている。

【本文引用①】

いかにと胸つぶれ心も空に思しつるに、いとうれしけれど、世離れたる所に長居したまふもおぼつかなく、「世づかざりける御有様どもかな」とうち泣きたまひて、「なほ、はべらん限りは、様を変へんとな思しそ。頼む方なきおのれをふり捨てたまひて、かへりて御罪にもならん」など書きて、御衣や何やとよろづの物どもたてまつりたまへり。(巻三、三五八頁)

ここで、男君の母親は、男君も女君も「世づかざりける御有様ども」と感じ涙を流している。男君の母親はもとと子を思う親としての側面が描き出されているため、息子を心配する様子が描かれることは当然であろう。この場面で注目すべきなのは、「御有様ども」とあって、母親が涙を流す対象が男君だけでなく、女君もまたその対象であるということである。きょうだいを思って涙を流す母親の姿は、男君の母親という役割だけでなく、きょうだい二人の母親という役割を担うかのような描き方がなされているのである。これによって女君の母親の存在はさらに薄れていくと考えられる。つまり、

物語の中では、きょうだいにそれぞれいた母親の存在が、二度目の取り替えを経て、片方の母親が両方の母親の役割を担うように描かれているのである。<sup>②</sup>

さらに畳み掛けるように、本文引用②であげた、男君が女東宮に産ませた若君を預ける場面が描かれている。右大将が隠れて生ませた子どもを尚侍の母親に預けるといふ、ねじれた親子の関係も、母親の役割が男君の母親に集約されたと考えれば、一応納得はいくだろう。これにより、物語の構想上の綻びはなくなるともできると考えられる。

今本作者は、読者に物語の構想上の綻びについて意識させないようにする工夫として、女君の母親を物語から退出させた。しかし、構想上の綻びを無くそうと思うのであれば、今本作者は女君の母親、男君の母親のどちらも物語世界から退場させるべきだったのではないだろうか。片方の母親が登場し続ける限り、読者の意識をきょうだいの実家ないし母子関係から遠ざけることはできない。片方の母親にきょうだいの母親としての役割を集約しようとするのであれば、そこに行き着いた経緯を描かなければ読者は納得しない。この物語では左大臣家の内情はわからず、左大臣の北の方が男君の母親に決まったということは描かれていないのである。読者が物語に抱いた疑問はそこまで描かなければ、解消されたといえず、今本作者は綻びを繕ったことにはならない。



## 五、女君の宮中復帰

第三に「女君の宮中復帰」があげられる。まず、女君が左大臣家から出ることに今原作者の工夫が読みとれよう。左大臣邸の女君の部屋は「西の対に渡りたまふ」（巻一、一七二頁）、「例の中納言の方なる西の対」（巻二、二七一頁）とあることから、母親と同じ西の対にあると見て間違いなく、読者にも女君関係者の住まいは西の対という認識が植え付けられている。宰相中将はこの西の対で休んでいた女君を襲っているため、宰相中将にも西の対には女君母子が暮らしているという認識がある。つまり、物語の登場人物にも女君の住まいが左大臣邸の西の対だという共通理解があると見てよいだろう。しかし、きょうだいが元の性役割に戻ったあと、宰相中将は字治から失踪した女君を捜索しようとするので、この左大臣邸の西の対に女君の部屋があるという認識は改めておく必要がある。女君が異装を解いて京に戻ったことが発覚してしまうだけでなく、左大臣家がきょうだいを取り替えて宮中に出仕させていたという秘密の露頭に繋がってしまう可能性を摘んでおかなければならないためだ。本文引用①の時点では、きょうだいが元の性役割に戻り左大臣邸に帰ってきた時は、女君は東の対の男君の部屋に入ったため、ここで住まいの取り替えは完了している。仮に宰相中将が女君を捜そうと西の対を訪れてもそこにいるのは男君であり、宰相中将は女君を見

つけることができないようになっている。

しかし、住まいを入れ替えたところで母子関係を入れ替えなければ、藤中納言のむすめの子供が男であるという世間の認識は変わらず、男君と東宮との間に生まれた若君の養育先についての辻褄が合わなくなる。

そこで構想上の綻びから読者の意識を逸らすべく、今原作者は女君の宮中復帰を描いたと考えられる。性役割を取り替えた後、男君が右大将として官界に復帰し、女君も尚侍として宮中に復帰する。尚侍という身分を利用して、産前の女東宮の世話に付きつきりになることで、左大臣邸への出入りを減らしているのである。母子の接点が薄れば薄れるほど、母子関係の矛盾に読者の視線が向くことも少なくなる。また、宮中に居場所を移すことによって、宰相中将に捜索されることを防止する。宰相中将は女君が男装して宮中生活を送っていたことは気づいたが、尚侍が女装した男君であったという事実には気づいていない。そのため仮に、官界に復帰した右大将が真の男と気づいたときにも、尚侍がかつての女君であるという発想には至らないのである。左大臣邸にいるよりもむしろ、宰相中将も出入りする宮中に女君をやることにより、宰相中将の目をくらませたと見えよう。

女君の宮中復帰は物語の展開上必要不可欠なので、今原作者が綻びを隠すために施した工夫という側面だけを強調するわけではない

が、読者の意識は女君が近くにいるのに気づかない宰相中将の愚かさに向かい、母子関係に矛盾が生じていることも気にとめなくなる。そして、この後作者は、『とりかへばや物語』をどう読むかという物語の読み方を読者にゆだねるのである。

## 六、おわりに

女君の母親は、きょうだいが互いの性役割を元に戻した後、物語世界から退場する。『とりかへばや物語』は母子関係という矛盾を抱えているが、母親が退場することによって、読者はその矛盾の存在に気づかない。物語世界の世間の認識は、藤中納言のむすめ―右大将、源宰相のむすめ―尚侍という母子の構図を思い浮かべているが、母親が描かれないことで読者はこの構図を意識することがなくなる。それぞれの母親の住まいについても、きょうだいが京に戻るときに、さりげなく入れ替えるような描き方をして辻褄を合わせているのである。また、二度目の取り替え以降、女君の母親を物語世界から退出させ、母親としての役割を男君の母親に集約しようとする試みがある。しかし、このように片方の母親を描かないことは逆に読者の意識をきょうだいの母子関係ないし左大臣家の内情へと誘導してしまう恐れもある。左大臣家の内情については、物語で触れられていないため、たとえ父左大臣の北の方が男君の母親一人に定まっていたとしても、物語の矛盾についての読者の疑問は解消し

ないのである。この点にまでは今原作者の工夫が至らなかったと考えられよう。

また、女君の宮中復帰や男君の自邸新築を描くことも、閑自家からの脱却を行い、物語に生じた綻びからさりげなく読者を遠ざけている一要素である。この展開があまりにも滑らかに進んでいき、また、母子関係の矛盾ではなくきょうだいの秘密の露頭へと読者の興味関心を移動させるという工夫を施している。

物語に生じた綻びに完全に気づかせないことはできないが、『とりかへばや物語』にはその綻びを「天狗の業」で片付けることなく、より無理のない物語にしようという今原作者の工夫と努力の跡が見られる。しかし、構想上の綻びを引き起こしたことは事実である。展開上、同腹のきょうだいという設定にすれば、このような矛盾は生じないため、都合がいいように思われるが、「双子」というモチーフをあえて回避しているようにも思われるのはやはり、双子が忌み嫌われる対象であったためであろうか。

いずれにせよ、異腹のきょうだいという無理のある物語設定をした上で、この矛盾に読者の視線が向かないような工夫を行っていることはやはり評価するべきであり、ここに今原作者の技量を見ることができようと思う。

【注】

(1) 以下表記の煩雑を避けるため、本稿では性別が女であることを女君、男であることを男君とする。

(2) 吉海直人『住吉物語』・『とりかへばや物語』を中心に、『中世王朝物語を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九七年九月）論文は引用する際に、本文に私に傍線を付した。以下その他の引用も同じである。

(3) 中島正二『とりかへばや』のきょうだいとその周辺（池田利夫『野鶴群芳 古代中世国文学論集』笠間書院、二〇〇二年十月）

(4) 『新編日本古典文学全集』の巻三、三七七頁に、

殿は、月日ごろの隔たるままに、多くの御祈り山々寺々尽くして、限りに思し入りたるに、今宵の夢にいと尊びけよらなる僧の参りて、「かくな思し嘆きそ。この御こともは、いとたひらかに、明けん朝にその案内聞きたまひてん。昔の世よりさるべき違ひ目のありし報いに、天狗の、男は女となし女をば男のやうになし、御心に絶えず嘆せつるなり。その天狗も業尽きて、仏道にここの年を経て多くの御祈りどものしるしに、皆こと直りて、男は男に女は女に皆なりたまひて、思ひのごと栄えたまはんとするに、かく思し惑ふもいささかのもの報いなり」と見たまひて、…

とあり、きょうだいの取り替へは天狗の仕業とされている。

(5) 『とりかへばや物語』の引用は、すべて『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。『とりかへばや物語』は石椋敬子氏校注・訳。底本は、国文学研究資料館蔵初雁文庫本である。本文を引用するに際して、括弧の中に『とりかへばや物語』における巻数と頁数を記した。

(6) 森本葉子氏は『とりかへばや物語』考―逆転する二人の「北の方」―（愛知淑徳大学国文学会『愛知淑徳大学国語国文 第22号』一九九九年三

月）において、

物語の設定段階では同じ扱いに見えた「北の方」たちは、実は平等ではなく、物語の初期段階における源宰相のむすめの優位性が確認された。しかし、その優位性は中期段階で逆転されることになる。と、述べておられる。しかし、母親としての役割は源宰相のむすめに集約していくため、森本氏の考えに疑問を抱かざるを得ない。

―おさない・あやの、広島大学大学院文学研究科博士課程前期在学―